

オープンキャンパスにおける学生広報スタッフのあり方と今後の展望

小田寛人，影山千恵美

キーワード／社会力、キャリア教育、学生運営、学内インターンシップ

はじめに

周知の通り、常葉大学短期大学部では学生募集事業の一環として、高校生を本学に招いて募集活動を行う「オープンキャンパス」を実施してきている。年度毎に見直しを続け、ここ5年間だけでも実施時期や回数において、いろいろと推移している。平成22年度に年4回(5月、7月、8月、9月)行っていたのを、平成23年度から前年度3月実施を加え年5回に増やし、平成25年度には9月実施を止め年4回に戻し、平成26年度からは5月実施を6月実施に変更した。現在は3月、6月、7月、8月の年4回実施というスタイルで定着している。「オープンキャンパス」は、言うまでもなく本学の教職員が行う重要な募集事業であるが、いつからか本学在學生や卒業生にその協力を仰ぐことになり、今や学生の協力なしでは、短大ならではの親しみやすく魅力あるプログラムを実施できないという状況となっている。教職員に加え多くの学生も巻き込んだオープンキャンパスは、短大全体の一体感を覚えることのできる行事であり、本学のビッグイベントとなっている。現在5月に行われている「学園内高校キャンパス見学会」を入れると、年度末の多忙な時期から夏の猛暑の時期にかけて、ほぼ毎月のように開催されるにも関わらず、常に積極的な運営が行われ、来場した高校生やその保護者にも満足いただけるような実施ができていると思っている。オープンキャンパスに来場する高校生にとって、教職員に比べ年齢の近い在學生が多く参加していることは、それだけで親しみやすい雰囲気を作り出してくれている。また、高校生自身が学生の姿を将来の自分と重ね合わせやすく、身近な存在として相談しやすい環境も作り出してくれている。

オープンキャンパスの本来の目的は、もちろん入学生の募集活動であり、高校生やその保護者に直接学校の雰囲気を伝えるとともに、入試情報や学科の内容について理解を深めてもらうためのものである。オープンキャンパスに在學生を参加させるのは、本学の募集活動そのものの助けになっているだけでなく、参加している学生たち自身にとってもプラスの効果が働いているように思われる。学生自身が短期大学部のこと、各学科のことについて、より理解することとなり、また、接遇マナーをはじめ、個別相談にも対応できるコミュニケーション力を養えるなど、在學生の社会力を育てる良い機会にもなっている。学生たちに任せている分は、現在はまだ受動的な働き域を超えてはいないが、いずれ学生が主体となり、オープンキャンパスの企画から立てていくような形になっていけば、2年間という短い期間で社会性を磨く短大において、そのキャリア教育にも一役かうことが期待できよう。今や、本学のオープンキャンパスは、学生に「学内インターンシップ」の機会を与えるという別の目的を考え始める段階に来たと言ってよいかもしれない。

学生参加型のオープンキャンパスは今や軌道に乗ってきているものの、最初から現在の形

になっていたわけではない。「協力学生」と呼んでいた時期から、現在の「学生広報スタッフ」と呼ぶ状態に、過去の反省に基づいて方針の転換や改善を行った結果であり、今後はさらに良い形になっていくことが期待される。本稿では、学生参加型のオープンキャンパスのこれまでの経緯と学生スタッフの活動状況を報告し、平成 24 年度の学生広報スタッフに対して実施したアンケート結果を参考にしながら、オープンキャンパスに学生スタッフとして関わることが何をもたらすのか、またその関わりが学生自身にとってどのような影響があるのか、今後の展望を含めて考察してみたい。

1. 学生参加型オープンキャンパスの経緯

本学のオープンキャンパスに学生が参加するようになって 10 年は経過していると思われるが、平成 22 年度までは、オープンキャンパスに関わった在学生は「学生広報スタッフ」ではなく、「協力学生」と呼ばれる扱いであった。「協力学生」は、学生全員に募集ということで声をかけたのではなく、各学科の教員が学科の催しの必要に応じ、直接学生に協力を仰ぐ形で参加してもらっていた。協力を依頼した内容は、例えば、平成 19 年度当時では、「在学生懇談コーナー」での高校生の相談役、音楽科の「学生によるミニコンサート」での演奏者、「プチ体験（レクリエーション）」での模擬授業補助者など、学科ごとに行う催しが主なものであった。学科単位の催し以外に人形劇のサークル「ピッポ」の公演、学生寮の学生による「学生寮の見学ツアー」もあった。学生への依頼が教員に任せられていたのは、教員は学生の適性等をよく知っているため頼みやすく、学生もよく知った教員からの依頼ということで承知しやすかったのであろう。よって、教員や学科からの要請もあり、謝礼として協力学生にはクオカード（2,000 円 / 人）を渡していた。おかげで、必要な協力学生は十分に確保できていたが、各教員、各学科に裁量が任せられており、短大全体としてのまとまり、組織性に欠けていたといえる。

オープンキャンパスを運営しているのは事務部署の入試課であり、短大として全学科がまとまりをもったイベントとして実施するには、指示系統がはっきりしていないといけない。平成 20 年度には、学科単位の催しに加え、高校生を出迎える「受付」や施設を見学する「キャンパスツアー」、「昼食配布・片付け」など総合的な役割等にも学生の協力が必要かつ有効であるとして、入試課職員が学科単位でとりまとめられた学生の中から、その担当の学生を割り当てるようになった。この総合的な役割を担う協力学生は、割り当てに従ってオープンキャンパスの当日担当の仕事を行うが、普段から接点のある教員の指示ではなく、接点のあまりない職員からの指示を受けることになり、慣れていない関係性から、指示に戸惑うこともあったようである。また協力学生へ指示をする職員の方も、どのように学生に指示したらよいか、どの部分を学生にお願いしたらよいか分からず、結局職員だけが忙しく仕事をしていて、協力学生は何もやることなく遊んでいたということもあったようである。また、学科単位で依頼した学生のためか、来場してくれた高校生に対し、「常葉短大に来てくれた高校生」というよりも「〇〇学科に来てくれた高校生」という見方が強く働き、自分の所属する学科のことをやっていればよいという雰囲気の子が多かったのも事実である。

そこで、平成 23 年度からは、手伝ってくれる学生のあり方を考え、その募集方針の転換、募集方法の改善を行った。これまでの、ある特定の学生に探りをかけてお手伝いをお願いす

る、という方法はとらず、学生全体に呼び掛け、オープンキャンパスを自ら手伝いたい、スタッフとしてやってみたい、という学生のボランティア精神に訴えることにした。自発的にやる気を持った学生を集め、その学生たちを「学生広報スタッフ」と呼ぶようにし、教職員と同じく行事を運営する一員であることを意識させた。また、より組織性を持たせるためにも、オープンキャンパスの運営を行う入試課が中心となって、学生スタッフの募集をすることにした。また、前年度までの「協力学生」には渡していたクオカードでの謝礼を、「学生広報スタッフ」になってからは、当日にお弁当や飲み物とキャンパスグッズを渡すという形に変更した。一方、楽器演奏など学科単位で依頼する「協力学生」はそのまま残し、必要に応じてオープンキャンパスの一部分に協力してもらっているが、謝礼は「学生広報スタッフ」と同様、当日のお弁当や飲み物を渡すだけにした。

こうして平成23年度の「学生広報スタッフ」の募集は、新入生に対しては4月当初のオリエンテーションで、新2年生に対しては同じく4月当初のクラスガイダンスの中で、「学生広報スタッフ募集」というチラシに登録用紙を付けて配布し、入試課職員が学生の前で直接登録を呼びかけた。それにより、入試課職員の顔と名前も学生に覚えてもらう機会となり、その後のスタッフ会議（2-3参照）等の連絡も円滑に進められる状態を作り出した。登録したい学生は、登録用紙に必要事項を記入して事務室の前の箱に提出してもらうことにした。

ここで平成22年度「協力学生」の参加延べ数を<表1>、平成23年度「学生広報スタッフ」の参加延べ数を<表2>に示す。

<表1>平成22年度 協力学生延べ人数（人）

日本語日文学科	英語英文科	保育科	音楽科	専攻科			合計
				国語国文専攻	保育専攻	音楽専攻	
12	25	49	11	3	24	9	133
97				36			

<表2>平成23年度 学生広報スタッフ延べ人数（人）

日本語日文学科	英語英文科	保育科	音楽科	専攻科			合計
				国語国文専攻	保育専攻	音楽専攻	
20	26	47	6	4	0	0	103
99				4			

平成22年度は本科在学学生だけではなく、専攻科生が多く参加している。専攻科生は本科に2年間在学し、その後さらに専攻科に2年間在学している学生である。本学に在学してから3年目あるいは4年目の学生であり、本学のことを良く知っているため、教員が学生に協力を仰ぐ際には本科生より安心して仕事を任せることが出来る学生であったといえよう。一方、協力学生として関わった専攻科生の中にはオープンキャンパスに来場する高校生は専攻科ではなく本科に入学するかを検討している生徒であるので、自分たちが既に本科を卒業している立場で接することがよいのだろうか戸惑いを感じていた学生もいた。それを裏付けるように平成23年度「学生広報スタッフ」という形でスタッフを募集した際には専攻科生はほとんど登録しなかった。

確かに専攻科生は本科生より長く在学している分、頼れる存在であり安心できる。それに比べて、本科生は入学して間もなく、本学をアピールする広報スタッフとしては未熟で不安な要素が多い。しかし、オープンキャンパスに関わるという経験を積みながら、学生の「広報スタッフをやってみたい」という前向きな気持ちを活かすことができれば、十分に価値があると感じている。

平成 24 年度の募集は、前年度同様、オリエンテーションやクラスガイダンスで募集チラシを配布した。前年度は登録用紙に記入して紙媒体を使用した。学生のスマートフォンの使用率を考え、用紙への記入ではなく、web からの登録に変更した。登録のための専用サイトとして「オープンキャンパス応援し隊」を設置した。これにより、学生は募集チラシに掲載した登録サイトにアクセスし、学籍番号、氏名、連絡のための携帯電話番号、メールアドレスなどを入力し、さらに年何回か実施するオープンキャンパスの日程の中で参加できる日をチェックして申し込めるようになった。紙媒体を使用しなくなることで、記入方法などの説明が簡略化されたのはよかったが、入試課職員が学生の前で直接学生広報スタッフ募集を呼びかける機会までも省略してしまうことになってしまった。そのためか、平成 25 年度の学生広報スタッフの登録が減少してしまった（2-1 <表 3>を参照）。そこで、平成 26 年度は学生に直接入試課職員が呼び掛ける機会を確保するために、フレッシュマンキャンプ¹の会場が近くなったこともあり、キャンププログラムの中で入試課職員が現場に赴いて直接学生に呼び掛ける形を復活させた。以後、現在に至るまで同じ方針、同じ方法で「学生広報スタッフ」を募集している。

2. オープンキャンパスにおける学生広報スタッフの状況

2-1 学生広報スタッフ数の推移

学生広報スタッフの登録数は平成 23 年度 42 人、平成 24 年度 68 人、平成 25 年度 33 人、平成 26 年度 54 人であった。<表 3>に年度ごとの科別学年別学生広報スタッフ登録数を示す。

<表 3>科別学年別学生広報スタッフ登録数（人）

	日本語日本文学科		英語英文科		保育科		音楽科		合計
	1 年	2 年	1 年	2 年	1 年	2 年	1 年	2 年	
平成 23 年度	3	3	4	5	7	16	1	3	42
平成 24 年度	5	5	0	4	42	9	0	3	68
平成 25 年度	1	2	2	0	12	16	0	0	33
平成 26 年度	2	5	12	5	19	8	3	0	54

¹ 新入生のために入学式後に例年 2泊3日で行うオリエンテーション。平成 25 年度までは静岡県浜松市で実施していたが、平成 26 年度から静岡県焼津市で行っている。

全体として保育科学生が多く登録していることがわかる。特に平成 24 年度は 1 年生の登録数が 42 人と多かった。学生が率先してスタッフをやってみたいと申し出てくれることは大変良いことであるが、スタッフ人数が多すぎて、担当する仕事がなく、友だち同士でしゃべってしまい、遊んでしまっている状態が生じることもあった。同じ科の同じ学年の学生が多く固まりすぎると、緊張感に欠ける可能性もあり、注意する必要があると感じている。

＜表 4＞学生広報スタッフ登録数の科別割合

	日本語日本文学科	英語英文科	保育科	音楽科
平成 23 年度	14.3%	21.4%	54.8%	9.5%
平成 24 年度	14.7%	5.9%	75.0%	4.4%
平成 25 年度	9.1%	6.1%	84.8%	0.0%
平成 26 年度	13.0%	31.5%	50.0%	5.6%

＜表 5＞平成 26 年度の全在籍者における科別在籍者割合

	日本語日本文学科	英語英文科	保育科	音楽科
平成 26 年度	15.9%	11.2%	62.5%	10.3%

＜表 4＞は登録した学生広報スタッフ登録数の科別割合を示したものである。この割合をどのように考えるかであるが、＜表 5＞に示した平成 26 年度の全在籍者 678 人における科別在籍者割合を参考にし、＜表 4＞にある登録した学生数の割合がこの数値に近くなれば、学科間のバランスはとれていると考えられる。

日本語日本文学科は在籍者割合 15.9% と比較すると、平成 25 年度が少なかったが全体的に良好な割合であろう。他 3 学科は年度によって変動が大きい、音楽科は 0% となっている年度がある。オープンキャンパスでは希望する学科の先輩を見たり、先輩に話を聞いたりすることを楽しみにしている高校生がいるため、科別での学生広報スタッフが「ゼロ」というのは避けたい。ただ、音楽科からは、学科の催しとして学生による演奏会に参加してくれる「協力学生」が別に多くいる。「学生スタッフ」としての登録がなくても演奏会に参加してくれている協力学生が高校生と話すことのできる機会をつくるように配慮すればよい。英語英文科は在籍割合が 11.2% であるので、少ない年でも 10% 前後の確保ができるとよいであろう。保育科は保育実習が多くなる 2 年生の登録数が減少するため、1 年生だけで在籍割合の 62.5% を維持することは難しいであろうが、登録数の半分 50% 程度を維持したい。しかし実際には、この表の学生スタッフ登録の学科別割合が、オープンキャンパスの運営に影響があるというわけではない。

<表 6 > 学生広報スタッフ参加数

	5月	7月	8月	9月	合計
平成 23 年度	22	32	25	18	97
平成 24 年度	46	21	26	25	118
平成 25 年度	16	13	9	--	38
平成 26 年度	*30	21	20	--	71

* 5月ではなく6月の実施

次に学生広報スタッフとして参加した人数をみてみよう。<表 6 > はスタッフの参加数をまとめたものである。実際にはオープンキャンパスは3月にも実施しているが、年度末で学生広報スタッフは1年生のみに偏るため表には掲載していない。

平成 23 年度は 22 ～ 32 人、平成 24 年度は登録数が 68 人と多かったが、各回の参加者数は 21 ～ 46 人であった。平成 25 年度は 9 ～ 16 人、平成 26 年度は 20 ～ 30 人であった。スタッフ登録数が少なかった平成 25 年度は参加数の確保が難しく、もう少し多くの登録あるいは参加を呼びかける必要を感じた年であった。一回のオープンキャンパス 300 ～ 500 人程度の来場者数に対応するには学生広報スタッフは概ね 20 ～ 30 人が適当と考えている。平成 25 年度の不足、平成 24 年度 5 月の過剰を除けば、ほぼ適切な数を確保できたと言えよう。このようにスタッフ登録数が学科ごとで多少の偏りがあっても、自分の所属に関係なく学科の枠を超えて同じ学生スタッフとして働いてもらいたいと考えている。

2-2 学生広報スタッフとしての仕事

学生がオープンキャンパスで学科単位の催し以外に担当する仕事内容は、「学生広報スタッフ」を始める前からも、高校生を出迎える「受付」や施設を見学する「キャンパスツアー」、「昼食配布・片付け」などがあった。そして平成 23 年度の「学生広報スタッフ」となってからは、それまでの担当に加え、舞台に立っての総合的な司会、学科説明や学生生活紹介なども行うようになった。さらにオープンキャンパスは午後の開催であるが、学生スタッフは午前中から参加し、会場設営などの準備を手伝っている。学生広報スタッフのための控室を用意し、職員が朝礼を行うように、当日の朝、簡単な打ち合わせをし、準備にとりかかる。担当職員の指示のもと、のぼり旗の配置、受付の机の設置、配付物の倉庫からの運びだし及びセッティング、掲示物の貼付など行う。オープンキャンパス終了後には、会場の片付けも行い、最後に控室に集合し、終礼を行っている。学生広報スタッフの中には、従来の「協力学学生」という立場で各学科の催しへの協力を依頼されている者もあり、総合的な役割から各学科の模擬授業補助者や音楽科の演奏会の演奏者など、一日中忙しく頑張ってくれている。こうした学生たちの行動や態度を見てみると、経験を積むにしたがって社会性が磨かれ、成長していると感じないわけにはいかない。

2-3 学生スタッフへの指導と「スタッフ会議」

オープンキャンパスの日程及び企画は、前年度の入試委員会で検討し決定する。オープン

キャンパスの各回のテーマを決め、テーマに則り大まかな構成を考える。年間を通して内容を決定することで、オープンキャンパスの告知をできるだけ早く行い、高校生の参加を促すねらいがある。その後当年度の入試委員会で各回の1ヶ月程前には細かなスケジュールを確定し、教員、事務職員、学生広報スタッフの担当を決めるようにしている。

学生広報スタッフを希望する学生は、4月から昼休みを使って週に1度開催される「スタッフ会議」に参加する。「スタッフ会議」では、入試課職員が、スタッフをやってみようか迷っている学生の質問に答えたり、オープンキャンパスをどんな内容でどのように進めていくかを説明したりする。また既にスタッフに申し込みをした学生に対して、学生広報スタッフ用のポロシャツのサイズを聞いたり、スタッフとしてやってみたい仕事の希望を聞いたりする。この希望とは、司会に挑戦してみたい、人前で話してみたい、逆に司会はやりたくないなどである。人前で話すことに抵抗がある学生に無理やり担当させるより、やってみたいという学生にチャンスを与えたいという考えによるものである。さらに誰と一緒に仕事がしたいかも希望があれば聞いている。最初から話したこともない学生同士で仕事をしてもらいより、友だち同士と一緒に仕事をしてもらえるように配慮するためである。

5月のオープンキャンパス²を実施するまでは、ほぼ毎週昼休みを利用してこの「スタッフ会議」を開いているが、5月のオープンキャンパス終了後は、定期的に「スタッフ会議」を開くことはせず、打ち合わせの必要な担当の学生にメールで連絡をとり、打ち合わせをする。学生との連絡は基本的にメールを利用している。

オープンキャンパスの中で、学生広報スタッフとして誰でもできるようにしておいてもらいたい仕事が、キャンパスツアーである。30分程度で見学できるようにツアー内容を職員がまとめ、オープンキャンパスまでに案内できるよう学生に指示している。学生各自が時間のある時に確認しておくように伝えとともに、不安のある学生は事前に職員に申し出てくれば、ツアー場所と一緒に見学すると伝え、学生の不安を取り除くようにしている。その他、司会や学科説明や学生生活の説明など発表する担当については、職員が大まかなシナリオを伝え、学生が話しやすいようにアレンジしたり、追加すべきことがあればその内容を相談したりしながら、原稿を作成し、オープンキャンパスの前日及び当日にリハーサルを行っている。

このように5月開催のオープンキャンパスを目標に「スタッフ会議」を開催することで、入試課職員との距離を縮めていくことができていると感じる。職員を名前で呼ぶようになり、質問も多くされるようになった。困ったことや相談があれば気軽にメールを送ってほしいと学生に伝え、相談しやすい雰囲気づくりを心掛けている。

3. 学生広報スタッフに対するアンケート調査

3-1 アンケート調査の目的

平成24年度は学生広報スタッフとして募集をした2年目であり、登録数も前年度の2倍となった。なぜ、学生スタッフをやろうと思ったのか、学生スタッフをやってみてどんなこ

²平成26年度から5月のオープンキャンパスを6月に移行したが、5月に学園内高校キャンパス見学会を実施しているためそれに合わせている。

とを感じ、どんなことを思ったのか、学生の思いや考えを知りたかった。そして、学生広報スタッフという立場を通して、学生自身が少しでも成長を感じたのか、何か得るものがあったのか知りたいと考え、アンケート調査を行うことにした。

3-2 アンケート調査の方法

学生広報スタッフに対するアンケートは、平成 24 年 9 月 21 日、学生広報スタッフとして登録していた学生 68 人にメールにて依頼をした。質問項目は A～H の 8 項目で、入試課職員が作成した（【付録】参照）。回答数は 52、回答率 76.5% であった。

回答した学生の内訳は、日本語日本文学科 8 人、英語英文科 2 人、保育科 41 人、音楽科 1 人であった。学年は 1 年生が 39 人、2 年生が 13 人であった。その内 2 年生で、前年度から引き続きスタッフとして登録していた学生は 10 人であり、その内訳は日本語日本文学科 3 人、英語英文科 2 人、保育科 5 人、音楽科 0 人であった。

3-3 アンケート結果から

質問項目 C で学生広報スタッフとして登録した理由について尋ねた。結果を<表 7>に示す。

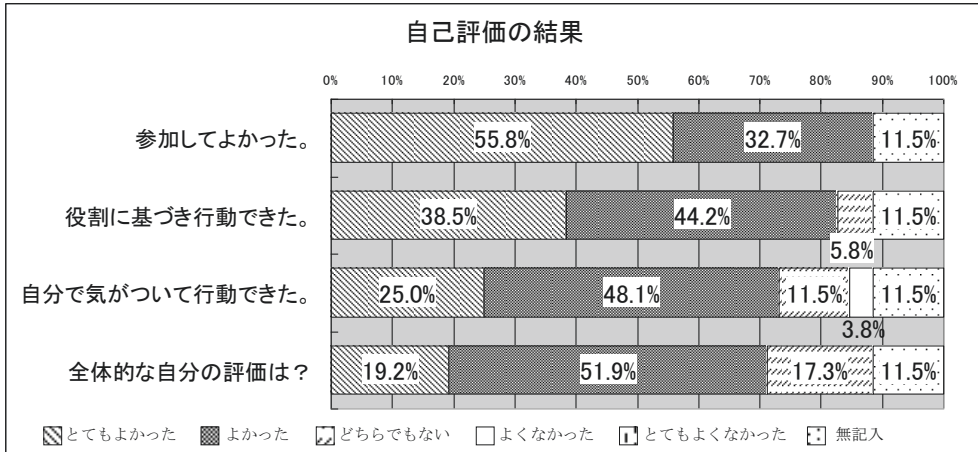
<表 7> 学生広報スタッフとして登録した理由

1. 自分が受験生の時、学生スタッフにお世話になったから	19 人
2. 楽しそうだから	37 人
3. 友だちに誘われたから	14 人
4. 目立ちたかったから	0 人
5. 先生に言われたから	4 人
6. 昨年度も登録したから	7 人
7. なんとなく	2 人
8. その他の理由	5 人

「楽しそうだから」が 37 人で全体の 42%、半分近くを占めており、「学生広報スタッフ」に対して大変なイメージがなかったということであろう。次いで「自分が受験生の時、学生スタッフにお世話になったから」が 19 人で全体の 22% であった。19 人全員が 1 年生であった。当時高校生だった学生が、オープンキャンパスに来て学生に対応してもらい、そのことが強い印象となって残っていたからこそ、本学に入学し、かつて自分が対応してもらったように高校生に対応したいと学生が考えていることがうかがえる結果となった。

「8. その他の理由」として 5 人の記述があった。「学生生活をより楽しくおくるために何でもやってみたかった」「ふだんあまり関われない高校生や事務の方、あまり知らない先生、学生と関わりを持って良い経験となると思ったから」「オープンキャンパスのスタッフに憧れていたから」「人のために何かをすることは自分に他人にもプラスになるから」「高校生が可愛いから」と前向きな回答があり、短大生として、人の役に立つ、人とのつながりを大切

にするという記述があったことはとても好ましいことであった。



<図1> 自己評価の結果

質問項目Gで自己評価について5段階で尋ねた。<図1>に結果を示す。

「参加してよかった」の項目で55%の学生が「とてもよかった」と答え、「よかった」と合わせると9割近くに上る。学生が関わることを奨めてきてよかったと感じた。「役割に基づき行動できた」では「とてもよかった」「よかった」の両方をあわせると8割以上の高い割合である。「自分で気がついて行動できた」の項目でも「とてもよかった」「よかった」両方をあわせると7割強で高い割合を示した。しかし、前項の「役割に基づき行動できた」と比べると「どちらでもない」「よくなかった」の答えが増えている。与えられた役割はきちんとこなせるが、自分で気がついて行動することについては、「行動できた」と自信をもって言えないと感じていることがうかがえる。この自信の無さからか、「全体的な自分の評価は？」の項目では「とてもよかった」の答えが減り「どちらでもない」の回答が増えている。

なお、無記入の11.5%については、今回学生広報スタッフとして登録をしたが、日程が合わず一度も参加できなかった学生6人である。

学生広報スタッフとして感じたこと、思ったこと等を学生の言葉で記入してほしかったため、質問日は項目に分け自由記述とした。

○参加して得たこと、よかったことなど

「積極的に行動出来るようになった。人前で話すことが好きになったし、緊張しなくなった」「学科紹介で多くの人たちと話す機会があって、とても良い経験になりました」など、司会や学科紹介、学生生活の説明など大勢の前で話す機会を有意義に感じ、それが経験となって自分が成長できたことを感じている様子がわかる。

また「高校生たちの力になれたと思う」「高校生にアドバイスできて、自分の体験をいかせて良かった」「質問されて教えたときに、ありがとうございますって言われたとき」など高校生と接することで自分が役に立っていることを実感できたことも学生自身の喜びになっていることもうかがえる内容であった。

さらに「常短の知らなかったことや、他の科のことも知ることができたので、常短を考えている後輩にも勧めることができた」「常短は自分がすごく居心地の良い所で、大好きな所だし、そのことを確認できたし、受験生にも伝えられたことが良かった」など、同じように短大にいても、他学科でどんなことを行っているのか知らないことがあり、それを知ることでますます本学を好きになったことや、高校生に本学のことを説明することで改めて自分のいる短大がどんなに良いところかを再認識することができたことをあげている学生もいた。学生が他学科のことには全く興味がなく、自分の学科のことだけを考えているというわけではなく、学科を越えて、本学の良いところを知り、それを高校生に伝えたいという気持ちを持っていることがわかる。

○反省していることなど

参加できなかった、参加日数が少なかったなど不参加に関わる記述が多く見られた。学生広報スタッフとして登録したにも関わらず、参加できなかったことに対して責任を感じていることがわかる。

また「大きな声で騒いでしまった」「自分の仕事がよく分からなくてあいまいにしてしまったこと」「役が少なかったのでだらけてしまった」「人数が多すぎて自分が手持ちぶさたになってしまった」など、スタッフが多すぎたことが、学生にこのような気持ちを抱かせてしまった一つの要因と考えられる。

「もっと意識すれば、もっとたくさん仕事ができ、協力もできたと思う」「もっといろいろな仕事を積極的にやりたいなと思った」「もっと自分から行動をしたかった」「もっと自分から気づいて行動したい」など、仕事をしたい、もっと役に立ちたいという気持ちを持つ学生がいることがわかる。

4. 今後の課題について

4-1 学生広報スタッフ参加の人数制限について

学生広報スタッフをやってみたいという学生自らの意志で申し込んでもらうことは、大変良いことであるので、オープンキャンパス予定参加者数に対して、多少学生広報スタッフの参加人数が多くても制限を加えることなく参加してもらった。しかし、アンケートの中で学生が自ら反省しているとおり、緊張感に欠けてしまい、大声ではしゃいで遊んでしまったこともあったようである。そのことは、来場してくれた高校生や保護者の方に良い印象を与えないだけでなく、募集という短大のビッグイベントのスタッフとして一丸となって関わる教職員との信頼関係を損なうことになりかねない。

その対応策として、学生広報スタッフの参加希望数が多い場合には入試課職員が学生の参加を制限することが考えられる。広報スタッフの登録の際に友だち関係を把握しているので、30人必要なら友だち同士をグループにして30人を選ぶ。この方法であれば時間がかからず、選定した結果を学生に伝えるだけであるので容易である。学生スタッフの中には高校生と話すことを楽しみにしている学生もいるだろうし、スタッフに憧れを抱いている学生もいるだろう。しかし、学生に事情を説明したうえで選定結果を伝えれば、学生は理解してくれるで

あろう。

他の方法も考えられる。学生たちにどのように対処したら良いか考えてもらうのはどうだろうか。職員が選定するより、はるかに時間がかかり選定する方法が見つからず、話し合いが紛糾することもある。そもそも参加人数制限が必要なのか、制限する以外に方法を見つけることができる可能性もある。人数が多いから緊張感がなくなってしまうのではなく、人数が多くてもそうならない意識を学生自身が持てば良い。オープンキャンパスが終了したときに、学生に課題を提供し、それに対してどのように対処するかを話し合わせることで、受動的な関わりから学生主体の関わりに変化する良い機会になる。自分はどのようにしてオープンキャンパスの学生広報スタッフとしてここにいるのか、ではいったい何をしたら良いのか、来場してくれた高校生は何を求めているのかに、気づききっかけづくりのために、職員がすべてを決めるのではなく、学生に話し合い時間を与えることも大切であろう。

4-2 学生によるオープンキャンパスの運営について

学生アンケート最後の自由記述で、英語英文科2年生の学生が「学生だけの力で（オープンキャンパスを）運営できるよう努力すべきだった」と記述していた。彼女は自身が1年生のときからスタッフとして参加していた。当初から2年生が1年生を指導することに対して積極的に行いたいと申し出ていた学生である。ただ、残念なことに2年生が少なかった上に、学生広報スタッフのほとんどが保育科であり、これを実現することが難しかった。これを裏付けるように同じく英語英文科2年生の別の学生はアンケートに「(学生広報スタッフは)保育科が多く、英語英文科は肩身が狭く、あまり参加している気分ではなくなっていた」と正直な自分の気持ちを記述している。

彼女が言うように「2年生が1年生を指導する」という体制は、2年間という短い期間の短大では縦のつながりが構築しにくい。学生アンケートでもわかるように2年生になって1年生から引き続き登録している学生は52人中10人であった。2年生は就職活動が始まるためスタッフ数は減少する。中でも保育科は就職活動に加えて保育実習が多くなるため、在籍者数は多いが、学生広報スタッフ数は減少する。このような状況が後輩の指導を困難にし、学生による運営を難しくしている。運営のためには学生の組織力、リーダーシップなど能動的な関わりが必要になる。大学であれば4年間という比較的長い期間があり、ほとんどの学部でゼミがある。そのため、先輩後輩という縦のつながりが作りやすい。ゼミのつながりがあれば、先輩が後輩を指導することが日常的に期待できる。先輩が後輩にノウハウを引き継ぎ、年を重ねるごとに経験が蓄積され、それが組織力となり、自然にリーダーとしての自覚が育っていくだろう。

では、短大での学生による運営の方法は考えられないのだろうか。

オープンキャンパスは大学にとって学生募集の重要な位置づけのイベントである。年間を通してテーマを決め、各回の実施内容の方向性を検討し、詳細なスケジュールを作成していく。教員、事務職員、学生広報スタッフなど人の配置を決め、当日までに必要な準備を進め実施する。このようなビッグイベントに、少しでも学生が主体で行うことができれば、全面的に学生による運営に至らずとも、その経験は学生にとって価値のあるものになるであろう。授業では味わうことができない経験こそがオープンキャンパスに関わる学生広報スタッフの

醍醐味であろう。例えば、オープンキャンパスで行っている学科紹介では、今は職員が書き上げた原稿を読むという役割であるが、学科紹介を学生自らが考え原稿を作成する。決まった時間内に読み上げる難しさや学科の特長をどう表現するかなど文章力と伝え方が問われることになる。または施設を見学するガイド原稿を作成する。30分を標準見学時間として、どこを案内するか、何を伝えるかを考える。学科によって使用頻度の少ない施設があるため、よく分からない施設については、他学科の学生にリサーチする必要がある。学科を超えつつながりが学生を大きく成長させる。このように学生が能動的に関わることでさまざまな経験を積むことができ、その経験を後輩に教えることができれば、学生による運営も実現のものとなっていく。それが学生のキャリア教育につながり、将来大きな成果を期待できるであろう。

4-3 教職員の関わりについて

現在、学生広報スタッフの配置やオープンキャンパスまでの打ち合わせに関しては、入試課の職員が対応している。役割分担、当日までの段取り、準備、片付の指示に至るまで入試課職員が主体となって行なっている。しかし、職員は大学間や部署の異動があるため、いつも同じ職員が関わるできないし、その職員の力量に因るところも大きい。

一方、オープンキャンパスは、教員にとっては授業でみる学生とは異なる新しい一面を見つけることができる良い機会になるし、職員にとっては教員から聞く学生の印象とは異なる印象を得る機会になる。学生は所属する集団によって異なる顔を持ち、自分自身の位置づけ方も違う。そのさまざまな顔を、教員と職員が互いに引き出し、学生を教育育て、まさしく教育の場にてできれば、オープンキャンパスというイベントは、募集としての重要なイベントというだけでなく、常葉短大にとってもっと重要なイベントになるろう。

このような、事務職員の異動や力量に因る事情、また教員と職員の両面からの教育的視点を踏まえ、委員会という組織で学生広報スタッフの指導について検討しようと試みている。本学の委員会は教員だけでなく事務職員も含んで構成されており、中には職員が副委員長を務める委員会もある。教職協働がなし得る本学だからこそ、実現できるのではないか。

実際、平成 26 年度から広報委員会で学生広報スタッフの指導について検討を始めている。今後は広報委員会を中心に、ループリックを活用してオープンキャンパスにおいて学生が自分の成長を感じることができるような指導をしていきたい。あるいはポर्टフォリオを利用して振り返りの時間を設けるなどの仕組みづくりをしていきたい。

5. まとめ

今回、学生広報スタッフに対するアンケートから、いくつかのことが知ることができた。まず「学生広報スタッフ」が高校生に与える影響は大きいということである。スタッフとして登録した理由の質問項目で「自分が受験した時、学生スタッフにお世話になったから」と答えた学生がいた。「(短大の)先生や職員にお世話になったから」ではない。ここに学生が広報スタッフとして関わる意義があると考えられる。オープンキャンパスに来場する高校生や保護者は、この大学で学べる分野は何か、自分の希望と合致しているか、施設は充実しているか、学生寮があるか、通いやすいかなどさまざまなことを、そこにいる「学生」を通して見

ている。保護者は近い将来、自分の子どもが短大生となる様子を「学生広報スタッフ」と重ね合わせ見ている。高校生は受験を乗り越え在学している先輩「学生広報スタッフ」を見て、自分もこうなりたいと望んでいる。だから入学後、同じように学生広報スタッフを経験したいと感じるのであろう。学生がオープンキャンパスに関わることは大変意味のあることである。

次に学生は人との関わりを求めているということである。高校生と話すことができた、他学科の友だちや新しい友だちができた、普段話せない職員と話すことができたなど人との交流が学生たちを参加してよかったと感じさせている。スマートフォンやインターネットで友だち関係が希薄になっていると言われる社会の中で、学生が人との交流を楽しかったと感じてくれているというのは大変良いことである。また学生は人の役に立ちたいと思っている。高校生から「ありがとうございます」言われて喜びを知ったり、自分の体験が活かされて良かったと感じたりすることで、自分を必要としてくれる人がいると感じている。だから学生はスタッフとしてきちんと仕事をしたいと思っている。参加できなかったこと、遊んでしまったことなど仕事ができなかったことを反省している。それはスタッフとして仕事をすべき立場であることを理解しているということであろう。

それならば、我々教職員が学生をサポートできることがあるのではないか。ポートフォリオのように、オープンキャンパスが始まる前に自分の目標を記入する機会を与え、それぞれオープンキャンパスが終了したあとに、どんな役割をしたのか、自分はどのような態度あるいは意識で臨んだか、反省を含め、目標達成できたかできなかったか、できなかった場合はどうしてできなかったのか、次はどうしたいのかなどの記録を残すようにする。「やりっぱなし」にするのではなく、そのように自己評価することによって、反省点を次回に活かせれば、学生の成長を助けることができる。さらに毎回どのように学生が感じ、どのようなアドバイスを求めているのかを知ることで、我々教職員がサポートできることが見えてくるであろう。

学生広報スタッフ制度を始めて平成 27 年度で 5 年目となった。最近学生の動きが積極的になってきたと感じている。登録人数は平成 24 年度には及ばないが、少数精鋭で十分な手応えを感じる。広報委員会の先生方の協力もあり、保育科だけでなく、日本語日本文学科、英語英文科からの学生登録数も増加傾向である。また音楽科は平成 28 年度入学生から総合音楽専攻を設置し、その専攻の学生は音楽科で行う演奏会の運営スタッフとして関わるものと期待している。おそらくオープンキャンパスにも積極的に関わってくれるであろう。

平成 27 年 3 月に大学を卒業した学生に、大学生活について聞いたリクルートの調査が静岡新聞 (H27.8.12) に掲載されていた。「成長したか」の問いに女子は 81.4% が成長したと回答した。成長のきっかけを複数選択で聞くと男子の 1 位は「卒業論文・制作を仕上げたこと」、女子の 1 位は「アルバイトでの人間関係・責任の重さ」で「責任感、コミュニケーション能力など、お金以上にさまざまなものを得ることができた」といったコメントが寄せられたと記事は伝えている。本学の学生の多くも、このように仕事に対する責任の重さやコミュニケーション能力の向上に成長を期待しているとすれば、オープンキャンパスにスタッフとして関わることは有意義であろう。このオープンキャンパスというイベントは、「学生広報スタッフ」として与えられた仕事を責任持って行うことの大切さを知り、高校生や保護者の方との個別相談の対応や、他学科の学生あるいは事務職員と一緒に仕事をする、大勢の

前で話をするなどを通して、コミュニケーション能力を高めることができる場である。卒業後社会人になる学生にとって、社会性を磨くかけがえのない経験になるであろう。

学生アンケートから、学生がどんな期待を持っているのか、スタッフを経験したことでどんなことを感じたかを知ることができたが、その実施方法や質問内容については反省点もある。実施時期はオープンキャンパスがすべて終了したあとであったが、質問項目の「スタッフに登録した理由」はスタッフに登録するときに尋ねるべきだった。学生がどういう期待をもって学生広報スタッフに登録したのかをきちんと把握することができたであろう。すべて終了したあとで登録をした理由を聞いたのではどう思っていたか考えが薄れているだろうし、実際に関わって楽しいと感じていたから、登録した理由を「楽しそうだから」と回答した可能性も十分にある。また理由に対する回答項目も学生が学生広報スタッフとして関わることに何を期待しているかを引き出すような回答を用意すべきであった。これらの反省を踏まえ、今後も学生広報スタッフの在り方についてさらに深く考察していきたい。

本稿は、「はじめに」及び「1. 学生参加型オープンキャンパスの経緯」を小田が、「3. 学生広報スタッフに対するアンケート調査」及び「4. 今後の課題について」を影山が担当執筆し、「2. オープンキャンパスにおける学生広報スタッフの状況」及び「5. まとめ」を二人共同で執筆した。

参考文献

- 静岡新聞「リケジョ 84%「成長実感」大学生生活調査 文系男子は最も低く」平成 27 年 8 月 12 日朝刊 27 ページ
- 佐藤龍子「学生の自発性を促すキャリア教育と正課外活動」『京都大学高等教育研究第 13 号』2007
- 杉浦礼子、安部耕作、高木直人「短期大学におけるキャリア教育の必要性（その 1）」『高田短期大学紀要第 28 号』2010

